

和歌數首：文苑

著者	野尻，杉山，下山，陸治
雑誌名	龍南會雜誌
巻	2 3
ページ	4 5 - 4 5
発行年	1894-02-07
その他の言語のタイトル	和歌数首：文苑
URL	http://hdl.handle.net/2298/4353

こは羽さかえぬくれたり』

梅花先春

野尻

鶯もまた訪ひやらぬ梅の花

ふくさの風に香をうそへける

長閑けかる御世のしるしを見せんとや

梅さきにけり春まぢもせて

全

杉山

けふ降りし雪まの梅は咲にけり

まぢかき春を人のしるへく

春またてささ出にけり庭の梅

梢にうたふ鶯もかぢ

梅花先春 二首

下山 陸治

降る雪にまじりて匂ふ梅の香に

春待つ人や心よすらむ

春またて咲きにけらしも雪のまに

薫りは高し梅の初花

池水鳥

同

ふけてゆく夜半にや霜のまざるらむ

羽ふさひまゝさ池のむら鳥

大分の縣をさしてあらしの軍よ出立たむ

文苑

とする前の夜故郷の夢を見ければ

同

旅といへは暫しあこりの惜まれて

長き夜あかぬ古郷の夢

我郷里なる鏡の里を見ひと學の友數多來

たりけるに

同

名にしおふ鏡の池は清けれと

うつるさと夏のやどろはつかし

歳暮

同

おこたり乃身まはしはしと思へとも

とよめもあへぬ年のくれかゝ

俳句 (冠句附)

乳 貴 更けし人戸を叩兼

○○

夕 涼 團扇忘れて戻る橋

××

春の風 また薄寒し若菜摘

□□

梅の花 魁愛づる冬籠

××

月に泣く 罪あらぬ身の嶋に暮れ

△△

月の影 明かるうてよし夕涼

□□

帯になる 高嶺の腰を回はる雲

××

電信機 世界を括る球の糸

□□